

家書を読む

菅原道真
すがはらのみちざね

消息寂寥たり三月余
せきれうりよウゲツ

便風吹著す一封の書
べんふうすいちやくいっふうの書

西門の樹は人に移去せられ
さいもんノウエキニヒトニシテセ

北地の園は客をして寄居せしむ
きたちのそのかくなきよ

紙には生薑を裹みて薬種と称し
しやうがをつつやくしゆしやう

竹には昆布を籠めて齋ひの儲けと記す
こんぶをこいもまう

妻子の飢寒の苦しみを言はず
きかんのきんごんをいはず

是が為に還りて愁へ余を懊悩せしむ
これためかへかへうれわれあうなう

消 息 寂 寥 三 月 余

便 風 吹 著 一 封 書

西 門 樹 被 人 移 去

北 地 園 教 客 寄 居

紙 裹 生 薑 称 薬 種

竹 籠 昆 布 記 齋 儲

不 言 妻 子 飢 寒 苦

為 是 還 愁 懊 悩 余

1 【家書】 家族からの手紙。

2 【寂寥】 消息がとだえて寂しいこと。

3 【便風】 都合のよい風。

3 【吹著す】 吹き寄せた。

4 【移去せられ】 移し替えられ。

5 【園】 果樹・野菜・花などを植える土地。

5 【客をして寄居せしむ】 よその人が仮住まいをしている。

6 【生薑】 ショウガ。

6 【薬種と称し】 薬であるといい。

7 【竹には昆布を籠めて】 竹の籠には昆布を詰めて。

7 【齋ひ】 心身を清め、けがれを避ける。

7 【儲け】 食べ物。

9 【是が為に】 そのために。

9 【愁へ】 心配になり。

9 【懊悩せしむ】 深く思い悩ませる。

◆菅原道真 [845-903] 日本の平安時代の学者・政治家。「学問の神様」としてまつられている。

〈詩の原文は『日本古典文学大系72 菅家文章／菅家後集』による。〉